

## ちよつとひかえめに〈惜別の歌〉を。

新井裕

大学の研究者は自分の調査や体験の過程を講義やゼミを通じて語り、その成果を論集や紀要などに詳細に発表することができる。場合によっては叢書や学術図書のような形でまとめることもできる。

現場で働く同時通訳者や逐次通訳者は、そうはいかない。たとえ相手が長い亡命生活を経て戦後のオーストリアに初めて単独社民党政権をもたらしたブルーノ・クライスキーであれ、東独出身でありながら、ドイツのみならずEUのリーダーでもあったアンゲラ・メルケルであれ。あるいはまたリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー元大統領の通訳を経験したことも、公言するわけにはいかないようだ。ましてやその現場でのやりとりを残すことは、ご法度となるだろう。

以下では、記録として残ることの滅多にない吉村先生の軌跡を簡単にたどってみたいと思う。

吉村先生が中央大学に赴任された二〇〇〇年代初頭は、開設以来ほとんど変わることのなかった商学部ドイツ語教育が、大きくうまれ変わった時期である。

ちよつとひかえめに〈惜別の歌〉を。

週三回二年間連続のインテンシブ・コースの導入、留学の準備コースにあたるグローバル・ステューデント育成講座の開設、タブレット使用によるドイツ語ネイティブとのタンデム合同授業、ネットワーク上に音声や映像などの教材をおき、スマート・フォンでアクセスすることによって、質問や課題提出をいつでも、どこでも可能としたクラウド教育などなど。ゼミナールでも「国際人入門」「課題演習」「グローバルプロフェッショナルプログラム」「国際教養」などが次々に開講された。

おかげでそれまでの学部歴史ではあり得なかったほどの留学生をフンボルト大学やフランクフルト金融大学、ウィーン大学などの名の知れたドイツ語圏の大学に送り出すことが可能となった。

これらの未来の留学生に最初の一步から手解きをし、ドイツでも通用する力をつけ、交換留学生として一人前に育て上げることが、彼の仕事であった。

### 二十年間続いた「声をあげる沈思黙考」(Lautes Denken)

そのために吉村先生の採用した方法は、かなり異色であった。

「能力は生まれつき備わっているものではない」という前提に立ち、「きき耳」を立たせ、「硬い」口を開かせ、自分で作り上げたテキストを徹底的に、完全な形で暗唱させるのである。

スピード感を持たせ、よどみを調整する。

従来の伝統的な文法事項、ドイツ語教員が伝家の宝刀として後生大事に守り育ててきた手法は、とりあえず脇におかれる。

見えない眼、聞こえない耳にせつせと潤滑油を注ぎ込む。

するとまもなくもたつきが解消され、渋滞がなくなり、ドイツ語特有のリズムに乗った学生が走り出す。そうやってドイツやオーストリアの社会へ送り込んでゆく。

もっともこれは二〇二〇年のコロナ騒動が始まるまでの話である。以後はオンライン留学への切り替えがなされ、現在に至っているが、このメソッドは続いている。教室で行われる授業の中だけではない。さらなる高みを目指す学生たちは、週に一度彼のもとに集まり、声高に十分以上も続くシュワルツネッカーやステイーブ・ジヨブズのドイツ語を語ってゆく。

ウィーン大学の語学講習会への参加者人数は、今では商学部のみでもすでに一五〇名を突破している。他学部からの非公式の学生参加を含めると、その総数は優に二〇〇名を超えている状態だ。

### 二十回以上におよんだ「トークショー」(Öffentliches Gespräch)

この二十年の間なんとか吉村先生の「言語学」や「総合講座」「国際人入門」などの授業に参加したことがある(最近はおオンライン上でチャットを使う授業なので、そのあまりの展開の速さについていけないが)。興味深いのは、殆どの授業や講義で本人が語らない、ということだ。問題提起をする、レジメを配る。せいぜいそのくらいである。ピッチに立って、ホイッスルを鳴らす。後は選手が勝手にどうぞ、という具合だ。

時々、あるいは年によって頻繁にゲストが招聘される。

ワシントン在住のポール・ハーシー(ホワイトハウス通訳官)、パリ大学のジェラード・イルグ教授(ヨーロッパ

ちよつとひかえめに〈惜別の歌〉を。

中央銀行主席通訳)、エッセン大学シュピルナー教授、インド国際総合大学コンピュータ学部長ラーマン博士、ウィーン大学のヘルベルト・ツエーマン教授、ハンブルクの映画監督ブリギッテ・クラウゼ、ゲーテ・インスティテュート所長などなど。

中央大学や周辺の研究機関に留学中のフランクフルト大学、ミュンスター大学、テュービンゲン大学やウィーン大学の学生たちが飛び入りで授業をアシストすることもある。

講演を依頼されたこれらの人々も心得ているもので、あまり熱弁をふるわない。

聴衆が関心のありそうなテーマを扱い、簡単に紹介し、それを投げかける。そこからおもむろに吉村流の「トークショー」が開幕となる。

揚げ足を取り、誤解を指摘し、言葉尻や言い間違いに拘泥する姿勢は一切ない。たとえ学生の発言や報告が間違っているとしても、彼は耳をそばだてて聴き入っている。

その発言をフォローしながら、議論の萌芽に水を注ぎ、これを展開する可能性を探る。セッションの相手を論破することだけにエネルギーを注ぐ人のイメージは、ここには見られない。

## 二年間続く「ネイティブとの意見交換会」(Erfahrungsaustausch)

二〇二〇年にひろまった新型コロナウイルス感染症は、教育現場にも大きな混乱をもたらした。四月からの授業をどうするのか、キャンパスへの入構は可能なのか、学生は集まるのか、教科書はどう手渡されるのかなどなど。

もっと重要な案件もあった。通常春休みにドイツに里帰りし、夏学期の開始に合わせて日本へ向かうネイティブ教

員が入国できないのである。やがてこの措置はすべての留学生にまで波及し、「入国待機者」が多く生まれた。それまで機能していたタンデムの交換授業や中大に留学している学生を中心にしたセッションの機会が、忽然と消えてしまったのである。

二〇一一年の東京電力福島第一原子力発電所の爆発直後、日本から多くのドイツ人の姿が消えた。似たような状況がすぐに想定された。

現行のドイツ語教育は、多くのネイティブの方々には世話になっている。むしろその主たる部分は、ネイティブ教員の協力なしには展開しえない状況であるといっても過言ではない。

やがて新学期の始まりとともに、すべての教員に宛てて新しい教育方針が学長名で届くようになった。

双方向型授業、動画配信型授業、資料配信型授業、自習中心型の授業などの実施が次々に大学側から伝達・説明され、教員はその中から一つの授業形態を選択しなければならない。そしてこれを実践する手段としては Webex、Zoom、LINE などというそれまで耳にしたことのない名前があがってくる。自分自身のネット環境の構築だけでは済まされず、学生の授業環境までも詳細にチェックし、「ネット難民」がいないことを確認し、報告することが求められるようになったのである。幸い商学部では直ちに「オンライン授業対策委員会」が立ち上がり、複雑な手続きの手引き書が作成・配布された。

とはいえこのマニュアルは、日本側スタッフにとってもかなり高度で複雑な内容である。いわんや外国人スタッフにとっては、どうであったろうか。混乱はすぐに顕在化した。多くのネイティブ教員が蚊帳の外におかれていると感じたのである。十分な配慮も説明もないままに事態が進んでいる、と思えたのである。これはもちろんネイティブだ

けの不満ではなかった。多くの教員はなすすべもなく、膨大で解読困難な日本語と取り組んでいた。

やがて大学が「Webex」という語学教育にとってはあまり使い勝手のよくないビデオ会議システムの採用を決めると、効果的な運用のための検討会や研修会がやつぎ早に開催された。「オンライン授業システムの確保」「当該システムの運用の際の支援体制の構築」などと銘打たれた書類の山が、うずたかくデバイスの奥に築かれていったのである。もちろんどの学部でも、どの語圏でも兼任講師やネイティブの先生がたを対象に相談会や担当者会議を開き、レクチャーを行い、オンライン授業のスムーズな展開を確保するために多くのエネルギーを投入したことであろう。

それでもわたしは商学部のドイツ語教室ほどに親切に、丁寧な、定期的に集合し、「意見交換会」を実施した学部がたには、大学から英文での通達が届くシステムになっているそうだが、彼の逐語訳を聞いて初めてその隠された「含意」に触れることができたようだ。

複雑怪奇な専門用語の説明もさることながら、この月に最低一回は開催されている「意見交換会」は、上意下達の場所ではない。日本語情報のネットワークの外側にいる教員スタッフが、自らの貴重な体験を整理し、まとめ、報告できる数少ない場でもある。四〇年近くドイツ語教育に従事しながら、これほどなまなましい現場の声をこれほどまでに切実に、そして真剣に聞く機会はなかった。コロナ危機がもたらしてくれた千載一遇の好機かもしれない。

明治以来の長い伝統と優れた経験に基づくドイツ語教育は、「学校文法」の上にあぐらをかき、自らを刷新する機会を見失っていたのかもしれない。それを一挙に突き崩す形で登場したのが「オンライン授業」である。

二年目の春には「対面授業」復活の号令がでた。秋には、新たに「ハイブリット授業」や「ハイフレックス授業」

なるものが登場し、今や教場は百花繚乱の体である。

このチャンスが、あだ花だけを咲かすことになるとは到底思えない。

最後に四月からの吉村先生の予定を書いておこう。

すでに動き出しているワールドワイドの「ヨシムラ・トランスレーション」の仕事が待っているようだ。これまで国連やほかの国際機関の舞台で培ってきた動的な同時通訳と逐次通訳の能力が、今度は静的な翻訳者として発揮される番がきた。

この二〇年間の「福音」に心から感謝し、公の記録には残らないけれど多くの人びとの記憶に残るその軌跡を思い出しながら、ひとまずは〈惜別の歌〉としたい。